



パストラルハープ Vol.3

2年前のある日、ベッドサイドを訪問させていただいた A さんは、末期ガンでした。

病室を訪ねると、ちょうどご家族の方(A さんのご長男のお連れ合いの B さん)がお見舞いに来ておられました。

お二人にご挨拶をし、少しの間、ハープを弾かせていただくことを説明すると、A さんは一瞬、こちらをごらんになりましたが、すぐに痛みに耐えておられるかのように顔をしかめ、背中を丸めて右手でナースコールを握りしめ、時々、「ヒーッ」と小さなお声をもらしておられました。

A さんの浅く速い呼吸に合わせてハープを弾かせていただいている間、B さんは A さんの空いたほうの手を取り、さすっておられました。15 分ほど経過した頃、A さんの身体から力が抜け、ナースコールを握っていた手はゆるみ、眠りに入られたようでした。最初の頃と比べると、ゆったりとした呼吸になっていました。

B さんは、涙をぬぐいながら、「お義母さん、〇〇さん(ご主人の名)を生んでくれてありがとう」と小さな声で A さんに語りかけ、それからこちらを見て、「今日はわたしの夫の誕生日なんです。彼は仕事で来ることができませんが」、「音楽をありがとう。わたしも気持ちが落ち着いたというか…、今、なんだか安らかです」とお話ししてくださいました。

ほんのひとときの訪問ですが、時々このように患者様とご家族との間の、あたたかな絆を垣間見させていただくことがあり、同じ場に居させていただいたことへの感謝の気持ちでいっぱいになります。患者様とご家族、病院の皆様、出会いをアレンジして下さった聖なる存在に心から感謝します。

